



博士学位請求論文

日韓古代彫刻史の研究(概要)

大西 修也

平成13年9月

日韓古代彫刻史の研究〔概要〕

大西修也

1 研究の目的

本論文は、韓国仏教彫刻史における朝鮮三国期の彫刻、日本上代彫刻史における飛鳥前期・後期彫刻を中心に、個々の彫刻資料に対する様式研究、及び造像銘や仏典を中心とする文献研究に基づく、日韓古代彫刻の比較研究をめざしたものである。

欽明朝における百済王明（聖明王）による仏教の伝来をはじめ、敏達六年（577）の百済王昌（威徳王）による造寺・造仏工の派遣など、日本仏教黎明期における朝鮮三国、とりわけ百済の果たした役割の重要性についてここで指摘するまでもない。幸い、わが国には飛鳥大仏や法隆寺釋迦三尊像など、初期造仏活動で制作されたとみられる作品が伝世しており、初期彫刻の形成に果たした朝鮮三国の役割を具体的に知る手がかりが残されている。そうした作品を手がかりに、飛鳥彫刻における朝鮮三国彫刻の影響を明らかにする努力がこれまでも先学によって行われてきた。特に、飛鳥彫刻の中核をなす止利式仏像の形成をめぐる幾多の研究に示されている通りである。

従来の研究によると、止利式仏像を形成する造像様式については、中国彫刻における北魏後半期の様式がベースとなっていて、そうした中国彫刻様式を朝鮮半島の彫刻を媒介として獲得されたというのが基本的解釈である。ところが、止利式仏像と朝鮮三国彫刻との係わりについては、止利様式の源流を北魏系の造像を忠実に模していたといわれる高句麗仏に求める立場と、高句麗よりはむしろ南朝との関係が密接であった百済仏に求めようとする立場との二つに大きく分けられる。けれども、肝心の百済や高句麗の彫刻研究はどうかというと、百済仏研究は解放後に発見された新資料をまじえて、徐々に進展をみせてきたといえるが、それでも百済仏に比較すべき高句麗仏の資料が少ないために、両者の異同を明確にすることが難しい。しかも、百済様と高句麗様の解釈をめぐっては、その源流である中国彫刻の南北様式問題とあいまって意見の相違が認められる。そうした朝鮮三国期の造像研究がもつ宿命が、そのまま止利式仏像を中心とする日本の古代彫刻研究に影を落としてきたと言っても過言ではない。

かつて著者は、「百済の石仏坐像」「百済仏立像と一光三尊形式」、あるいは「法隆寺釋迦三尊像の源流」「百済半跏像の系譜」など、主に一光三尊形式や半跏像形式の仏菩薩像に対する考察を通じて、百済仏と飛鳥仏との関連性、飛鳥初期の造仏界における百済系造仏技術者の果たした役割の大きかったことを指摘してきた。こうした日韓古代彫刻の比較研究を行なう上で困難かつ重要な問題点は、飛鳥大仏や法隆寺釋迦三尊像の作者と伝えられる止利仏師と彼の考案になる止利様は、三国彫刻の何を母体として形成されたのか、また彼の作品にどれだけ日本の独自性、独創性が指摘できるのかという点である。そのことはまた同時に、止利式仏像の源流といわれる朝鮮三国期の造像、とりわけ高句麗・百済の彫刻にどれほどの様式差、作風の違いが認められるかどうか問われているのである。

本研究においては、そうした日韓古代彫刻史研究の現況と問題点をふまえ、主として朝鮮三国期の彫刻と飛鳥彫刻を対象に、造像銘や仏典の内容を中心とする文献研究、ならびに個々の彫刻資料に対する造像研究に基づいて、課題の解明をめざしたものである。韓国古代彫刻の研究分野では、高句麗・百済・新羅三国の造像表現における固有性の解明に主眼をおき、五胡式仏像に始まる三国初期彫刻の形成から七世紀末の軍威石窟三尊像の成立に至る彫刻史研究をおこない。また、日本の飛鳥・白鳳彫刻の研究分野では、朝鮮三国彫刻との比較研究に主眼をおき、造像様式に関する考察をはじめ、仏菩薩像の服制や莊嚴方法など様々な観点から比較研究を試み、飛鳥前期彫刻の中核をなす止利式仏像の形成から七世紀後半の野中寺弥勒菩薩半跏思惟像の成立に至る彫刻史研究を目指したつもりである。

もちろん、本研究の中核を構成する三国期の造像研究は、著者がユネスコアジア諸国派遣留学制度の支援をうけて韓国東國大学校大学院に留学した一九七三年から本格的に着手し、その後継続して実施された韓国古代彫刻資料の基礎的研究によってもたらされた成果が基になっている。また、日韓古代彫刻の比較研究ならびに止利式仏像の研究に関しては、上記の基礎的研究によってもたらされた成果、及び昭和五十八年から六十三年にかけて東京国立博物館で行われた「法隆寺献納宝物金銅仏の総合調査」に参加した折の知見が大きな助けとなっている。

2 本論の構成

本研究は、朝鮮半島を舞台に高句麗・百済・新羅の三国が覇を競った朝鮮三国時代の仏教彫刻史、及びその変遷と密接な関係にある飛鳥・白鳳時代の仏教彫刻史に関する研究成果を大系化したもので、仏教彫刻成立の思想的背景をなす古代仏教信仰の実態と仏教図像との関係についても可能なかぎり考察したつもりである。

本論文は七部二十二章からなり、最初の研究序説を除くと、本論は四つの部分から構成されている。

1) 朝鮮三国の初期仏教と仏教図像について仏典や壁画研究資料をまじえて考察した第二部、2) 朝鮮三国期の個々の造像様式や時代様式について考察した第三部と第四部、3) 仏像を構成する細部表現としての服制や莊嚴具としての光背や台座に記された造像銘を対象に日韓古代彫刻の比較研究を試みた第五部と第六部、4) 止利式仏像を中心に韓国古代彫刻史からみた飛鳥彫刻論をめざした第七部である。

とりわけ、第三部「朝鮮三国期の造像研究（各論編）」、及び第四部「朝鮮三国期の造像研究（様式編）」十章は本論文の中核となる部分で、著者が二十数年にわたって収集した韓国古代彫刻基礎研究資料に基づいて体系化した三国彫刻論となっている。最初の八章において、三国期の彫刻を「一光三尊仏」「菩薩半跏像」「宝珠棒持形菩薩」の三種の典型的な仏像形式に分類し、その特徴・形成過程・尊格などについて考察。次の二章で、朝鮮三国における造像様式の変遷を中国彫刻様式の受容と展開の視点から論述している。各章とも、現地調査に基づかず詳細なデータと豊富な図版資料が収録され、此処での考察に基づいてその後の三国彫刻様式論、ならびに日韓古代彫刻比較論が展開されることになる。

3 本論の概要

第一部「研究序説」

三国古代彫刻史の概要ならびに日韓古代彫刻史研究の現況と課題について述べ、韓国の自然と風土のなかで育まれてきた三国彫刻の特質、ならびに日韓古代彫刻史における本研究の位置付けと意義について説いている。

第一章「三国仏教彫刻の展開と本研究の位置付け」では、朝鮮三国における仏教美術の歩みをはじめ、高句麗・百済・新羅の仏教彫刻の展開について概説すると共に、そうした三国彫刻史における本研究の意義を明確にするため、各部章の位置付けを→〔第○部○章…〕の形式で具体的に明示している。

第二章「日韓古代彫刻史研究の現況と課題」は、三国期の彫刻を代表するとも言われる菩薩半跏像を取り上げ、過去六十余年に及ぶ日韓古代彫刻史研究の歩みと研究の現況について、近年の研究成果をまじえながら述べた部分である。特に、広隆寺弥勒菩薩半跏思惟像に瓜二つとされる国宝八三号菩薩半跏像の帰属国家ならびに制作年代をめぐる問題については、1950年代末から60年代中頃にかけて発見された新出資料を契機に、問題解明の糸口が見出され、新たな進展をみせる半跏像研究の現況について報告するほか、百済半跏像あるいは新羅半跏像という三国彫刻の系譜的研究の状況についても紹介する。

第二部「朝鮮三国期の初期仏教と仏教図像の研究」

朝鮮三国における仏教の伝来を踏まえ、初期仏教の実態と図像の関係について考察し、壁面の墨書銘や金銅光背銘にみえる釋迦文佛あるいは釋迦文像の出典と意味、初期仏教図像の形成における五胡式仏像の意義について論じている。

第一章「釋迦文佛像の流布」では、『弥勒下生經』によるといわれる釋迦文佛の出典を中国や朝鮮の造像銘ならびに墓誌銘から洗い出し、その典拠と東アジアにおける弥勒下生信仰の流布について考察。その結果、四世紀末を遡らないと考えられていた釋迦文佛の呼称が、竺法護を中心とする西晋の訳経活動下で漢訳された「弥勒下生經」「弥勒来时經」「弥勒当来生經」等を通して、少なくとも西晋末から東晋初には江南まで広く行き渡っていたこと。また、六世紀前半の成都萬佛寺出土石仏にも釋迦文像の名称が認められるほか、江南を中心に活躍した南嶽慧思や天台大師智顛の浄土觀を示す資料にも登場することが明らかになった。これは、弥勒下生信仰の流布とともに、過去・現在・未来という三世の時空的な把握の必要性から、過去仏としての釋迦を釋迦文佛と称したことを意味している。

第二章「五胡式仏像と三国初期彫刻」では、1959年に漢江北岸のソウル特別市トクソムから出土した五胡式金銅如来坐像と百済における初期彫刻との関係について考察。その結果、中国南朝の造像銘を有することで知られる元嘉十四年(437)銘金銅如来坐像、対馬・上県町佐護伝来の北魏興安四年(533)銘銅造如来坐像など中国初期造像に共通する造形原理が、扶餘新里出土金銅如来坐像にも

踏襲されていると指摘。新里出土如来坐像が百濟初期彫刻の資格を有する作品で、その制作年代も五世紀前半に位置させるべきと提唱している。

第三部「朝鮮三国期の造像研究」(各論編)

I 「一光三尊仏像の研究」

日本の初期造仏活動は一光三尊形式の造像を主体に開始されたが、朝鮮三国でも六世紀後半にはすでに一光三尊仏の盛行期に入っており、その主流が一光三尊仏立像であったことを明らかにする。また、鎌倉時代に全国各地で勧請模刻された善光寺阿弥陀三尊の源流を三国期に盛行した一光三尊仏立像に求め、『請観音経』に依拠した無量壽仏との関係について解き明かす。

第一章「百濟仏立像と一光三尊形式」では、百濟の故地である忠清南道扶餘の佳塔里廃寺址出土と伝えられる金銅仏立像の復原と制作年代の考察を通じて、六世紀後半にはすでに一光三尊仏の盛行期に入っていたこと。かつ佳塔里出土像が日本の法隆寺獻納宝物中 143 号金銅一光三尊仏立像の祖型であったことを実証し、中国仏像様式の影響については魏齊様を重視すべきで、東魏から北齊にかけて盛行した一光三尊仏立像が山東を経由して受容された可能性が高いと言及している。

第二章「善光寺式阿弥陀三尊の起源と展開」では、『覺禪鈔』や『扶桑略記』にみえる善光寺阿弥陀の百濟請来仏説、あるいは三国伝来生身如来説に注目し、『観無量寿経』以外に『請観音経』に依拠して制作された无量寿(阿弥陀)三尊仏が三国期に存在すると指摘。左右の脇侍菩薩に表現の違いがみられる辛卯年銘金銅一光三尊仏立像や癸未年銘金銅一光三尊仏立像は、観音と勢至を左右に配した無量壽三尊仏の作例であり、日本の船形山神社銅像菩薩立像もそうした無量壽三尊仏の脇侍菩薩であった可能性が高いことを明らかにしている。

II 「菩薩半跏思惟像の研究」

日韓両国の菩薩半跏像の特徴について分析、韓国半跏像制作のコンセプトは上半身裸形で天衣表現を省略し、腰の左右に玉を佩びたスタイルにあると指摘する。かつ細部表現の相違から百濟半跏像の系譜に属する作品と、新羅半跏像の系譜に属する作品が認められ、臀部に腰佩垂飾を巻き込む新羅半跏像の祖形が、1996年に山東青州龍興寺址から出土した石造半跏思惟像に求められることを明らかにしている。こうした韓国半跏思惟像は、兜率の弥勒菩薩でもなく過去の悉達太子でもない、新たな青年太子像をイメージして制作された弥勒下生像としての太子思惟像であると説く。

第一章「百濟半跏像の系譜」では、1984年に長崎県対馬の淨林寺で確認された渡来系銅造半跏像の調査研究を通じて、百濟半跏像の特色と展開過程について論じ、新羅半跏像とは異なる様式の系譜が存在することを明らかにする。かつ、宝冠・衣文・腰佩垂飾・足座などに特徴的な百濟半跏像は、中国南朝の梁代彫刻の影響下で形成された可能性が強いこと、止利式仏像の獻納宝物 155 号菩薩半跏像も、この百濟半跏像の系譜に属する作品であることを明らかにする。

第二章「青州出土石造半跏像と新羅半跏像」は、1996年に青州龍興寺址で発見された石造半跏思惟像が、上海博物館の天保四年(553)銘石造太子像、韓国の国宝八三号金銅半跏思惟像、広隆寺の

木造半跏思惟像と共通した造形原理で制作されていることを実証。特に、青州出土像の布輪状肩飾りや佩玉が彫刻ではなく彩色で描かれていることに注目し、造仏に際し彩色が施された絵図による原型（仏様）が使用されたと推測する。そして、新羅半跏像の特徴の一つである臀部に腰佩垂飾を巻き込む表現が成立する可能性を示唆していると説いている。

第三章「韓国半跏思惟像の尊格について」、上半身裸形で天衣を省略した独尊象としての天保四年銘石造太子像の出現は、従来の半跏思惟像とは異なる新たな価値契機、すなわち「太子像」に暗示される現実的人体表現の獲得という造形意図が作用しているからであると指摘。韓国半跏像の特色の一つである腰佩垂飾も、太子にして過去の悉達太子にあらず、理想国土を実現すべくこの人間世界に下生するであろう弥勒に新たな尊格を付与すべく導入された莊嚴具であると説いている。

III 「宝珠捧持形菩薩像の研究」

成都萬佛寺出土像の菩薩像が胸元に捧持する壺や盒状容器の変遷過程について考察すると共に、宝珠捧持形菩薩は、元来胸元に宝珠を捧持する菩薩を祖形として生み出された図像ではなく、中国南朝で盛行した舍利供養をシンボライズした図像の延長上に成立した図像であることを実証する。また、『請觀音經』に依拠して肉身固化を願った天台智者大師の浄土観をもとに、宝珠捧持形菩薩盛行の思想的背景を解き明かし、夢殿救世觀音像造立の背景に太子の兜率往生思想があったと説いている。

第一章「日韓の宝珠捧持形菩薩像について」、先行研究である金理那の初期宝珠捧持形菩薩に関する見解、及び宝珠捧持形菩薩を脇侍とすることで知られる瑞山磨崖三尊仏の分析を通して、日韓の宝珠捧持形菩薩の展開過程を考察。典型的な独尊形の宝珠捧持菩薩立像である辛亥年（651）銘金銅菩薩立像（献納宝物 165 号）は、初期宝珠捧持形菩薩の特徴を留めてはいても、新しい表現感覚が随所に認められることから判断し、七世紀中頃の制作説を支持している。

第二章「成都萬佛寺出土像にみる宝珠捧持菩薩の成立過程」、初期觀音像の持つ複合的性格に対する考察を通して、宝珠捧持菩薩像成立の背景に兜率往生と死後の再生を願う浄土観が密接に結びついていると指摘。従来、宝珠捧持菩薩とみられてきた成都萬佛寺出土の普通四年（523）銘釋迦文石像などの仏菩薩群像は、完全な宝珠捧持形ではなく胸元に壺や盒状の容器を抱いたプレ宝珠捧持菩薩であると説く。これらプレ宝珠捧持形の形態は、その制作年代からみて広口の壺状容器から盒状の容器へと徐々に変化し、最終段階で宝珠捧持形に至ると推測。とりわけ中大同三年（548）銘觀世音菩薩石像の両脇侍が盒を捧持することは、主尊の觀音菩薩の性格をこの脇侍菩薩が捧持する持物で象徴させたものにほかならず、兜率往生への先導的役割を担う初期觀音像の作例とみなしている。

第三章「宝珠捧持形菩薩出現の思想的背景」、天台大師智顛が行ったとされる「請觀世音懺法」の記述から、深山幽谷の地にある百済の瑞山磨崖三尊仏や泰安磨崖三尊仏、及び新羅の断石山神仙寺磨崖石窟は、請觀世音懺法が説く觀音招請道場に相応しい条件を備えていると指摘。特に、西方に広く開口する石窟の構造を利用して、窟の奥壁中央（東壁）に浄瓶を執る觀音菩薩立像を配した断石山石窟は、東に向かって楊枝浄水を捧げ、西に向かって五體投地して觀音を招請する儀礼空間に合致していることを明らかにする。また、『弥勒上生經』及び『請觀音經』が説く兜率往生の要件は、肉身固化を

果たして般若の熏修（舍利供養）を得ることであり、天台大師智顛が「請觀世音懺法」の修行を怠らなかつた理由もここにあると説き、戒定智を具足した舍利こそが般若の熏修を得るという意味において、舍利を象徴する容器も般若智のシンボルである宝珠も一体のものとなるのであり、舍利容器が宝珠様の盒であらわされるや、その一体化は可視的形態を通じて急速に推し進められ、宝珠捧持形菩薩像の出現をみるに至ると解釈している。

第四部「朝鮮三国期の造像研究」（様式編）

第三部で考察した三国彫刻の個別研究に基づき、三国彫刻の様式変遷について述べた部分で、三国彫刻の成立と密接な関係を有する中国彫刻様式の変遷を踏まえ、百濟石仏における魏齊様式の受容と齊隋様式の展開、新羅石仏の形成に及ぼした隋・初唐様式の影響について論じた中韓古代彫刻論となっている。

第一章「百濟石仏の展開と齊隋様式」、百濟第三十代の武王が遷都したとされる全羅北道益山郡進洞里石造如来坐像を中心に、七世紀前半の百濟仏坐像の特色とその独特な着衣法について考察した論文である。本像の石造光背については、法隆寺釈迦三尊像の光背と形制がよく似ていることで知られてきたが、これまで注目されなかつた本体も、その堂々とした体軀、身体に密着した薄い仏衣、穏やかな衣文の褶襞など、中国彫刻でいう齊隋様式の影響が看守されることから、武王代（600～640年）後半の作品であると推定している。本研究において、右肩に大衣の衣縁をみせる服制が、日本の法輪寺薬師如来坐像の仏衣着用法と共通すると指摘したことを契機に、その後、偏衫とみられるこの独特な仏衣着用法の研究が学界で盛んになる。

第二章「新羅石仏の展開と隋・初唐様式」、韓国慶州の石窟庵と並んで第二石窟庵と呼ばれている慶尚北道軍威郡街溪面の三尊石仏を対象に、その様式上の考察と制作年代について論じたものである。軍威石窟三尊仏は、観音と勢至菩薩を脇侍とする阿弥陀三尊形式の仏像で、本尊のブロック的な構成と脇侍菩薩の作風から、新羅における隋様式の反映と解釈し日本の当麻寺弥勒仏との関係を指摘する意見がある。そうした先行研究を踏まえながらも、新羅彫刻史における齊隋様と隋・初唐様の相違について詳述し、本像が隋・初唐様の影響下で成立した七世紀末（670～680年代）の作品であると説いている。

第五部「日韓古代彫刻の服制研究」

仏菩薩像の服制すなわち如来像や菩薩像の仏衣着用法や莊嚴方法のうち、大衣・偏衫・天衣などの仏衣着用法、佩玉・璎珞・肩飾りなどの莊嚴法を取り上げ、三国彫刻と飛鳥・白鳳彫刻の影響関係や異同について考察している。

第一章「偏衫を着用した如来像について」、忠清南道禮山郡花田里出土四面石仏の調査結果をもとに、その百濟彫刻史上での位置づけと、独特な如来の服制について考察した研究である。右肩に大衣の衣縁をあらわす花田里如来坐像の服制は、第四部一章の進洞里石造如来坐像ですでに指摘した偏衫とみられる仏衣を着用しもので、その初期形態を示す。本論では、花田里出土像と同様な服制を北魏時代

に発案された覆肩衣と解する最新研究の問題点を批判し、複数の衣を着用した仏像が果たして偏衫を着用しているといえるのか、それとも私見のように偏衫を大衣と同じ役割をもったもう一枚と解するべきかは、なお個々の作例に基づき慎重に検討すべきであると述べている。

第二章「瘦身タイプ半跏像にみる莊嚴法」、半跏思惟という変化に富んだ魅力的な姿もさることながら、日韓古代彫刻史研究の上で最も複雑多岐な様相を見せているのが菩薩半跏思惟像である。韓國に現存する三国期の半跏像だけでも磨崖仏を含めると三十体以上、我国にも觀松院銅造半跏像・神野寺銅造半跏思惟像・北辰妙見神社銅造半跏思惟像・淨林寺銅造半跏像・二十六聖人記念館銅像半跏思惟像など、数多くの渡来系菩薩半跏像が伝世している。そうした状況の中で、極度に胴や腕をひきしぼり、瘦身で伸びやかな体軀表現に特徴のある丙寅年銘金銅半跏思惟像（法隆寺獻納宝物 158 号）が、様式的には全く異なる大阪・野中寺弥勒菩薩半跏思惟像と同じ丙寅年（666）の制作とされることに疑問がもたれており、最近では野中寺像の銘文そのものに対する眞贋論争まで発展している。ここでは韓國の瘦身タイプ半跏像である宝物三三一号銅像半跏思惟像を例に、その造形感覚や莊嚴方法の比較検討を通じて、六六六年制作説の妥当性を主張している。

第三章「菩薩立像にみる魚鱗状天衣の解明」、鹿児島県日置郡吹上町伊作地区に伝世する金銅宝珠持菩薩像を例に、新出資料に対するフィールドワークの実際とその基礎研究によって得られたデータに基づき、菩薩立像の魚鱗状天衣と呼ばれている造形表現の分析と解明を行っている。正面觀照性の強い飛鳥前期の菩薩立像では、体側に魚の鱗状に繰り返される天衣を表現することが多いが、法隆寺釈迦三尊像脇侍菩薩、夢殿救世觀音像の表現を詳細に分析すると、両肩から二条の带状垂飾が伸び、両前膊部から体側にそって垂下する天衣と共に鱗状に左右に張り出しているのみで、天衣とは全く別物であると指摘する。一方、法隆寺旧大宝蔵殿金銅菩薩立像や辛亥年銘金銅菩薩立像（獻納宝物 165 号）では、この带状垂飾が両肩部分との接続を断たれて天衣と一体化したものであることを明らかにすると共に、そうした表現が生まれる造仏環境と絵図による様式受容の問題について解き明かしている。

第六部 「日韓古代彫刻の造像銘研究」

丙辰年銘金銅光背銘、辛卯年銘金銅光背銘、法隆寺薬師如来坐像光背銘など、朝鮮三国期の造像銘、あるいは法隆寺の草創と本尊造願の由来を記した薬師銘に対する分析研究を通じて、経典からは窺い知ることができない古代阿彌陀・弥勒信仰の実態、及び法隆寺西院伽藍再興の疑問について解き明かす。

第一章「丙辰年銘金銅光背と三国期の年号使用」、伝忠州出土金銅光背として知られている丙辰年銘金銅光背にみえる「建興五年」を高句麗の逸年号とする立場から、高句麗が忠州一体を実質支配していた六世紀前半、すなわち五三六年制作説を提唱。その一方で、中国の冊封体制下にあった百済では独自の年号を使用しなかったとみられること、新羅では法興王二十三年（536）に「建元」の年号を使用して以来、六度の改元を行っているが、「建興」という年号は含まれていないことを示して、同光背の新羅制作説を否定している。

第二章「造像銘にみる阿弥陀・弥勒信仰の実態」、韓国最古の阿弥陀仏といわれる辛卯年（571）銘金銅一光三尊仏の造像銘には、亡き師や父母の為に無量壽仏を敬造しながらも、善知識たちは弥勒の世界に共に生まれて菩薩にめぐり合い、説法を聞く機会を得たいとの願文が記されている。このように無量壽仏を造って願文に弥勒を願う造像銘は、龍門石窟造像記にみられるほか、弥勒像を造って阿弥陀の西方浄土への往生と弥勒の龍華三會に參席したいと願う造像銘さえある。このように西方浄土を仮の往生世界とみる考えは関白道長の場合も同様であったらしく、死後の再生を願う信仰が色濃く反映している。その他、阿弥陀五尊像と弥勒菩薩半跏像が正背面に浮き彫りされた蓮花寺戊寅年（678）銘四面石像、あるいは観音像の背面に半跏思惟像があらわされた造像例を取り上げながら、漢訳經典からは理解できない阿弥陀・弥勒信仰の実態と図像の関係について解き明かしている。

第三章「再建法隆寺と薬師銘成立の過程」、法隆寺の草創と本尊造願の由来を記した金堂薬師如来坐像の光背銘（薬師銘）は、用明天皇が発願者で推古天皇と東宮聖王（聖徳太子）が天皇の遺命を押し、寺と薬師像を完成させた内容構成となっている。この内容が、推古天皇が発願者で聖徳太子と馬子大臣に命じて飛鳥寺を建立せしめたとある元興寺縁起「丈六光銘」と同じ構成になっていることに注目、これまで指摘されているような「坂田寺縁起」を手本としたものではなく、「丈六光銘」を粉本にして薬師銘が造作されたと推測。蘇我馬子の私的性格の寺として創立されながら、国の大寺に加わることに成功した飛鳥寺の古縁起にならい、その内容を上回る格上げの縁起を造作することによって、上宮王家の私的性格の寺から官寺への転換を意図した結果であると説いている。

第七部「止利式仏像の研究」

法隆寺金堂の釈迦三尊像と薬師如来坐像を中心に、飛鳥前期彫刻を代表する止利式仏像の成立に及ぼした三国彫刻の影響、ならびに止利式仏像の展開について論じたもので、韓国古代彫刻史からみた飛鳥彫刻論となっている。

第一章「法隆寺金堂釈迦三尊像の源流」、止利派を主体とする初期造仏活動が一光三尊形式の仏像を中心に展開されたことは、法隆寺釈迦三尊像をはじめ飛鳥大仏、戊子年銘釈迦三尊像、甲寅年銘金銅光背（法 196 号）などの作例をみても明らかである。その代表作である釈迦三尊像を対象に、一光三尊形式、如来の服制、菩薩の宝冠形、光背の意匠と形制などから、止利式仏像の形成に及ぼした三国彫刻の影響、とりわけ南朝仏との密接な関係が指摘される百済系作品との異同について解き明かしている。特に、釈迦三尊の造像銘については、仏法興隆になぞらえた我国最初の年号使用例と解し、「法興元卅一年歳次辛巳」を「我国に仏法が興り元^{はじめ}てから三十一年を経た辛巳^{かひとものとし}年（推古二十九年・621）と読み、その起算の基となる年をわが国最初の僧尼の誕生をみた崇峻天皇三年（590）に求め

ている。

第二章「止利式仏像と薬師如来坐像」、薬師銘が新しい法隆寺草創の縁起造作を意図して、再建時（天武九年・680）以降に撰文、刻字されたことが明らかであったとしても、像自体の制作年代については別途、様式上の年代観に基づいて考察されるべきであるとして、金森氏の古像の補像、町田氏の偽古作説を批判している。特に、一光三尊仏から独尊像への転換という視点から、薬師如来坐像を

はじめ辛亥年銘菩薩立像、旧大宝蔵殿菩薩立像、献納宝物 149 号如来立像、献納宝物 145 号如来坐像の成立と制作年代の再検討を行い、薬師像の制作を七世紀中頃に近い止利派後半期の作品と位置付けている。

4 まとめ

以上、「日韓古代彫刻史の研究」では、飛鳥大仏や法隆寺釈迦三尊像の作者と伝えられる止利仏師と彼の考案になる止利様は、三国彫刻の何を母体として形成されたのか、また彼の作品にどれだけ日本の独自性、独創性が指摘できるかを主眼に、止利式仏像の源流といわれる朝鮮三国彫刻との比較研究を行ってきた。またその基となる朝鮮三国期の彫刻については、高句麗・百済・新羅三国の彫刻にどれほどの個別化、様式差が認められるのか、それとも三国彫刻に様式の違いと呼べるほどの差異はないのか検討してきた。

その結果、六世紀末から本格的に開始される日本の初期造仏活動が、一光三尊仏を主体に展開された背景には、やはり朝鮮三国期の彫刻がすでに六世紀後半から一光三尊仏の盛行期を迎えていたことと密接な係りを持っていたことがわかる。また、一光三尊形式のなかでも、百済では本尊を立像とする一光三尊仏立像が特に盛行したことが知られると共に、その背景に『請観音経』に依拠した無量寿三尊仏に対する信仰があり、その一部がわが国に受容されて善光寺阿弥陀として昇華していく様相も明らかになってきたと思う。この百済における一光三尊仏の形成と展開について、中国仏像様式との関係についてみると、その研究対象とした佳塔里出土像を中国彫刻の魏齊様式で理解し、六世紀後半の百済彫刻を理解するためには、黄海を隔てて百済に最も近い山東地方の彫刻、及び北齊仏の影響も看過できないと提唱したとき、周囲から強いお叱りをいただいたのも事実である。それから二十余年、1996年に山東省青州市龍興寺址から大量の石仏造像が発見され、そのなかに佳塔里出土像をはじめとする百済仏の源流ともいえる幾つかの作品が確認されたことにより、山東と百済との密接な関係が明らかにされつつあるのは幸いである。

そのほか、日韓古代彫刻の結びつきの深さを示す菩薩半跏思惟像についてみても、著者が日韓古代半跏像の特徴の一つとしてあげている、上半身裸形で天衣表現を省略し、腰の左右に玉環をあらわした半跏思惟像の源流が、この青州龍興寺出土像の中に確認された意義は大きいと思う。しかも、腰佩垂飾の表現が、臀部の下に巻き込む新羅半跏像の特徴をとどめていたことは、中国文化受容における山東半島の位置付けを再認識させるものであった。新羅が朝鮮三国の統一に向かう最初の契機は、六世紀後半の真興王による漢江流域への進出にあるといわれるが、その目的が対岸に位置する山東との交流拠点を確保することにあつたことはいうまでもない。最近の研究では、新羅がこの大陸文化受容の幹線ルートを開拓すべく、すでに540年代から漢江上流に着々と進出拠点を築きつつあつたことが丹陽赤城碑の発見等から明らかにされている。この山東半島を経て漢江→忠州→洛東江→安東→慶州と至る中国文化受容の幹線道にそって、新羅半跏像もまた分布し出土していることがわかっている。日韓の半跏思惟像研究の中心ともいえる広隆寺木造菩薩半跏思惟像、及び韓国の国宝八三号金銅菩薩

半跏思惟像もこのルートで受容されたスタイルが踏襲されたものであることが徐々に実証されつつある。今まで何気なく読んでいた円仁の『入唐求法巡礼行記』が伝える山東一带における新羅人の活躍は、そうした歴史の一端を伝えていたのである。

本学位論文には副題を付さなかったが、第二部の「釋迦文佛像の流布」、第三部-Iの「善光寺式三尊佛の起源と展開」、第三部-IIの「韓国半跏像の尊格について」、第三部-IIIの「宝珠捧持菩薩出現の思想的背景」、第六部の「造像銘にみる阿弥陀・弥勒信仰の実態」等のテーマからも知られるように、近年著者がもっとも興味を抱いてきた課題は、経典の解釈では窺い知ることができない東アジアにおける古代仏教信仰の実態と仏教図像との関係を解明することであった。まだ、所期の目的を達したとはいえないけれども、例えば法隆寺夢殿の救世観音像に特徴的な宝珠捧持形の祖形をさがし求めるうちに、中国の舍利供養菩薩に行きついたことは、東洋美術史研究の不思議さと奥深さを示したものであろう。同時に、今後ともこうした仏教図像成立の背景ともいえる思想的研究の必要性を実感する次第である。

平成13年9月